

地域と社会と私たちの“今”をつたえる

vol. 252

Letters Arpak

レターズ アルパック

2026
winter
ISSN 2432-5295



つむぐ景観、生まれる景観

CONTENTS

特集

つむぐ景観、生まれる景観

topic	これからの「景観」づくりを考える	1
事例 1	御堂筋の高質な道路景観づくりと維持管理・エリアマネジメント —「御堂筋ほこみちユニットベンチプロジェクト」がグッドデザイン賞受賞—	2
事例 2	市民・事業者・団体等と 一緒に創っていく貝塚市らしい景観	4
事例 3	全国伝統的建造物群保存地区協議会総会・研修会に参加 —伝建地区の持続的なまちづくりとは?—	5
事例 4	高松市中心市街地夜間景観ガイドラインの策定に向け支援	6
事例 5	景観とは、それに気づく人がいて成り立つもの	7
事例 6	人々の活動によって生まれる「景観」 —令和7年度都市景観大賞・優秀賞受賞—	8

建築からまちづくりを考える

新・関西将棋会館オープンから1年が経ちました	10
report パリ・ウィーンのメインストリートの今 歴史と未来が交差する都市	12
適塾路地奥サロン 開催報告	13
アル散歩 「守れる農地」と「守りきれない農地」	裏表紙

今回の特集テーマ
つむぐ景観、生まれる景観

「景観」は、普段の生活や様々な活動を営む私たちを取り巻く環境を主に視覚的な面から捉えたもの、といった説明がなされることが多いです。また「景観」は見る人の価値観によって捉え方が変わるものともいわれます。過ぎてきただ環境や見聞きしてきたもの、体験してきたことなどによって見え方も変わるということです。

平成16年(2004年)に制定された景観法にも「景観」という用語の定義はありません。同じ年に改正された文化財保護法では、文化財の中に「文化的景観」という概念が追加されました。「景観」は文化財でもあります。

アルバックが関わってきた「景観」に関する業務は、景観のマスター・プラン、景観ルール、市街地開発における景観ガイドライン、建築設計における景観形成、さらには市民の景觀学習など。フィールドワークによるデザインサービスや色彩調査、絵図や文学作品などの文献調査など「景観」をめぐる調査も多くの手掛けきました。こうした業務は草創期から多くの実績があります。

本号では、「景観」に関わるアルバックの今とこれからを考えます。

Topic

これからの「景観」づくりを考える

東京事務所長

坂井 信行

これからの「景観」を考える視座

景観は私たちを取り巻く環境を主に視覚的な面から捉えたものではあります。それだけで成立しているものではありません。景観を考えるときは物理的な空間だけでなく、背後にある風土や文化、つまり人と自然との関係や人々の営みそのものにも目を向ける必要があります。このように、景観が物理的な空間論だけ扱うことができないこと、また既存の市街地や新たな建築を前提としない地域を対象とする必要があるという点に鑑みると、これからの景観を考える上では、建築物の景観誘導や公共空間における景観整備によってつくり出すばかりでなく、心地よく過ごせる環境（＝景観）を実現していくために、人々自身がいかに関われる

トマがあります。都市をデザインすることは、結果として景観を形成することと同義といえます。これまでの都市デザインを振り返ると、1960年代は著名な建築家により大胆な未来の都市像が多く提案され、1970年代は集落のデザインサーキュラリと保存修景への関心が高まり、1980年代以降は大規模開発における市街地空間のデザインがテーマとされました（1）。現代は短期的な収益を優先した開発の興隆により、デザインは表層のお化粧に成り下がってしまった感があります。

成熟社会におけるこれからの都市デザイン（＝景観づくり）は、既存の市街地や開発圧力が大きくな地域において都市デザインの手法をどう実装していくかが問われてくると考えます。

都市デザインと景観

これからの「景観」づくり

景観において物理的な空間論は「情報」であり、見る人の主観によつて感じ取るものは「意味」ということになります。景観にとって「意味」が重要だとすると、見る対象の形を整えるばかりでなく見る人の感性を高めていくことこそが重要なポイントであるといえます。



のかという点に視野を広げていくべきといえるでしょう。

全身を使って「見る」世界

目の見えない人が美術を鑑賞する方法があります。見える人が絵画を前にして見えているものや見えていないものを言葉で語り、見えない人はその言葉から脳の中で絵画を想像（創造）するというものです。見えているものは客観的な「情報」、見えていないものは主觀が生み出す「意味」です。見えない人は触覚や聴覚など全身を使って周りの世界を「見て」います。見える人とのコミュニケーションを通して「見る」ことにより美術を鑑賞することができるのです（2）。

景観が私たちを取り巻く環境（＝世界）そのものであり、見る人の主観的な価値観によって捉え方が変わるものだとすると、こうした点はこれからの景観のあり方を考える上でヒントを与えてくれているようにも思えます。

Profile

坂井 信行（さかい のぶゆき）

東京事務所長。入社以来、景観・都市デザイン分野の業務に数多く携わり、幅広い視点から「景観」を捉える取組を続けている。リベラルアーツへの関心が強く、博物館学芸員の資格も有する。

主な著書に『地域のチカラ』（共著、自治体研究社）、『都市・まちづくり学入門』（共著、学芸出版社）など。

- (1) 「特集 日本の都市デザインの現在」、都市住宅、第302号、1984
- (2) 伊藤亜紗、目の見えない人は世界をどう見ているのか、光文社新書、2015

—「御堂筋ほこみちユニットベンチプロジェクト」がグッドデザイン賞受賞—

御堂筋の高質な道路景観づくりと 維持管理・エリアマネジメント

都市再生・マネジメントグループ 絹原 一寛

御堂筋ベンチユニットがグッドデザイン賞受賞このたび、御堂筋に設置するほこみちベンチユニットが、グッドデザイン賞を受賞しました。大阪市はじめ、関係者の知恵と創意工夫の結晶だと思っており、改めて感謝申し上げる次第です。

アルパックは、御堂筋沿道のエリアマネジメント組織であるミナミ御堂筋の会の設立から運営まで一貫して携わっており、今年で10年目を迎えます。この経緯も振り返りつつ、景観・都市デザインのあり方にについて、考えをまとめてみたいと思います。

御堂筋の歩行者空間化と道路協力団体の指定

ミナミ御堂筋の会（以下、「当会」）の設立契機は、平成26年の御堂筋イルミネーション南進化です。点灯区間が難波駅前まで延伸されることとなり、沿道の地権者が結集して組織化しようと声を上げました。そのうちに御堂筋の側道閉鎖、道路空間再編事業が発表、整備が進み、当会は他の団体と共に道路協力団体の指定を受け、放置自転車の啓発や清掃など沿道の適正化と、オープンカフェなどによる活用に取り組むこととなりました。

ミナミはかねてより安全・安心・ごみやたばこ、放置自転車やスケボー、客引きなどの課題を多數抱えており、御堂筋も例外ではありませんでした。道路空間の高質化、は口で言うのは簡単ですが、長らく地域で尽力する方々や道路管理者、警

管理の課題を乗り越えるほこみちベンチユニット誕生

こうした流れの中で、社会実験で設置した御堂筋のベンチを、常設化しようという流れになりました。巷の社会実験でよく使われるのは仮設の木製ベンチですが、先に述べた状況からすると、道路管理の面で安全性や耐久性が必要で、かつ御堂筋に相応しいデザインの要求がありました。一方で地域の方々からは「木の温かみが欲しい」というオーダー。どう両立するか悩み、関係者と議論してたどり着いたのが、道路付属物と占用物件のハイブリッドスキーム。道路管理者が耐久性のあるコンクリートベンチを整備し、その上の木製座面を道路協力団体が占用、市と覚書を締結の上で管理運営を分担するものです。

道路付属物のデザインも、滞在空間としての拡張性や柔軟性を意図し、大阪公



立大学嘉名光市教授、京都大学山口敬太准教授の監修のもと、GK設計により複数のデザイン案を提示の上、様々な組み合わせや活用が可能なユニット型に。株式会社OSHIROXがそれに応えてテラ

ゾー素材のオーダーメイドのコンクリートベンチを施工しました。木製座面は越井木材工業株式会社が、林野庁補助金も活用して耐候性のある湿潤処理を施し、有限公司田中製材所が家具インテリアのクオリティの美しい座面に仕上げ、施工を行いました。当会で維持管理を行い、会員企業のバックアップを受けていた旨の銘板

も設置しています。

並行して、万博期間を契機に、多くの来訪者をおもてなしする景観づくり、シティドレッシングとして、植栽帯の一角を大阪市から借り受け、植栽のグレードアップ、花壇整備を、ボランティア団体である花輪人プラス様の監修のもと実施しています。

持続的な維持管理をあらかじめ組み込んだデザイン

おかげさまでベンチも花壇も道行く方は大変好評をいただいていますが、こうした経験を重ねてわかったのが、「高質な景観形成」には「持続的な維持管理が最重要」と。誤解を恐れずにいうと。

「整備」はある意味簡単です。いかに、できたあとを高質に保ち続けるか。そこにはお金も人手も必要で、その持続的な仕組みが欠かせません。

その「使い手」である維持管理主体が使いやすいようあらかじめイメージし、そこから逆算して「整備」することも重要です。御堂筋の植栽帯は当時、花壇の活用をイメージしていくな

見も考慮されて整備がされていますので、大規模な投資をする前に有効性を検証する社会実験のデザインもまた、大事だと考えています。

専門家の協働を導く、専門家

行政、地権者、有識者、道路管理者、警察、デザイナー、専門メーカーなど・多種多様な主体の協働でこの景観デザインは実現していますが、それを導くプロセス、コードィネートは非常に重要な感じました。いわば指揮者・コンダクターのように、各パートの専門、特性や得意技を十分理解し、力を引き出しながら一つの作品を創り上げるプロフェッショナル像は、このプロジェクトにおいてしつくり来ている感じがします。

今年のグッドデザイン賞受賞者を見ていても、物的なデザインだけではなく、人と人、コミュニティや社会のデザインを行っている事例も多数。デザインの定義や領域も変わってきており、景観・都市デザインもまさにその流れにあるのでしょうか。作つてからがはじまりというデザインを、これからも求めていきたいと思います。

Profile

絹原 一寛 (きぬはら かずひろ)

当社執行役員兼都市再生・マネジメントグループ グループマネージャー。2025年11月より大阪事務所長に就任。都市・景観計画や都市デザイン・都心やまちなかのエリア再生・エリヤマネジメントなどに従事。ミナミ御堂筋の会・名古屋駅地区街づくり協議会の事務局のほか、大阪公立大学 都市科学・防災研究センターの客員研究員も務める。



市民・事業者・団体等と一緒に創っていく貝塚市らしい景観

都市・地域プランニンググループ 岡本 壮平



貝塚市は、大阪府南部・泉州地域に位置する人口約8.4万人の都市で、かつて「ちぬの海」と呼ばれた大阪湾に面し、海、平地、丘陵地、山間地と多様な地形を有しています。大阪府における貴重な自然海浜である二色の浜や、ブナ林（国指定天然記念物）などの自然生態系が保全されている和泉葛城山系、市内を縱貫して流れる近木川など、豊かな自然環境に恵まれる中、奈良時代の創建と伝わる水間寺や中世の自治都市であった寺内町など歴史的資源とともに、太鼓台やだんじり祭などの伝統行事に代表される独自の文化を継承してきました。

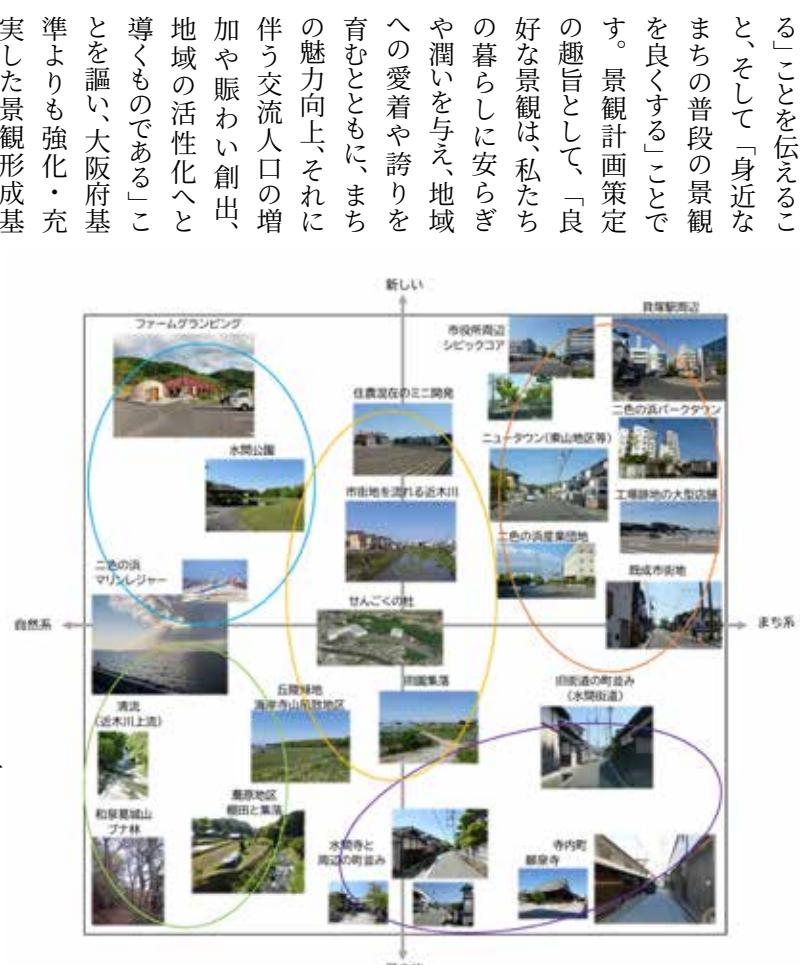
都市発展の歴史としては、戦後から高度成長期にかけて、鉄道・道路等の交通基盤の整備が進み、大阪都市圏の郊外都市として住宅地開発・工場立地が進みました。急激な都市化が進む中で、古いまちは姿を消し新しいまちが生み出されていきましたが、それが「まちの発展だ」として歓迎されました。そして、「景観とは歴史的なもので、現代のまちや暮らしには景観はない」といった認識が知らず知らずのうちに広まってしまったように思います。

景観法の趣旨に照らすと若干残念な状況の中、貝塚市景観計画を策定することとなりました。寺内町や街道筋の町並み、社寺、祭り等の重厚な歴史的資源を保存・継承することはもちろんのこと、重視したのは、「貝塚市には歴史以外にも、もっとたくさんの魅力的な景観がいっぱいあ

ること」を伝えること、そして「身近なまちの普段の景観を良くする」ことであります。景観計画策定の趣旨として、「良好な景観は、私たちの暮らしに安らぎや潤いを与え、地域への愛着や誇りを育むとともに、まちの魅力向上、それに伴う交流人口の増加や賑わい創出、地域の活性化へと導くものである」とを謳い、大阪府基準よりも強化・充実した景観形成基準を導入しました。さらに、景観アドバイザー制度により設計者の創意工夫を引き出すことや、今後、景観まちづくり活動を促進していくことなどを意図しています。また、市が景観形成の先導役となるべく、公共施設の景観ガイドラインを導入しているのも注目されます。

景観計画の策定後は、寺内町など貝塚市の景観のイメージリーダーを先頭に、古民家のリノベーションや景観整備、街を愉しむ活動の展開など、地域の皆さんのが主體となって取組が推進されることが期待されています。貝塚市らしい景観資源の保

業務名： 貝塚市景観計画策定支援業務
期 間： 2023年7月～2025年3月
発注元： 大阪府貝塚市
担 当： 岡本壮平、清水紀行、竹中健起、吉岡志穂、城本大暉、和田裕介、石川聰史



貝塚市にある多様な景観資源の抽出（出典：貝塚市景観審議会資料より）

全国伝統的建造物群保存地区協議会 総会・研修会に参加

— 伝建地区の持続的なまちづくりとは？ —

建築プランニング・デザイングループ 和田 裕介



嵯峨鳥居本のまちなみ（茅葺きの農家風民家）



嵯峨鳥居本のまちなみ
(瓦葺きの町家風民家)

館・南木曾
町妻籠宿・
白川村荻
町・京都市
祇園新橋・
京都市產
寧坂・萩市
萩市平安
古地区
壇し、それ
首長が登

制度が半世紀を迎えた今、次の50年を見据え、地域資産をいかに受け継ぎ、活かしていくかが問われています。各地区的熱意と実践を参考に、住民と行政が一体となつた持続的なまちづくりのあり方を改めて考える貴重な機会となりました。

Profile 和田 裕介(わだ ゆうすけ)

一級建築士。丹波篠山市篠山・福住伝統的建造物群保存地区における町並み景観保全協力建築士として、重伝建地区選定时から地区のまちづくりに携わる。

7月3日（木）・4日（金）の2日間にわたり、京都市で全国伝統的建造物群保存地区協議会（以下「伝建協」）の総会・研修会が開催されました。

伝建協は、文化庁の選定を受けた全国129地区の重要伝統的建造物群保存地区を有する106市町村で構成されており、総会・研修会は、町並み保存に携わる自治体職員や地域住民が情報共有や意見交換を行う場として、毎年開催されています。私は、丹波篠山市の重伝建地区（篠山及び福住）において、町並み景観保全協力建築士として活動している関係から、同建築士のメンバー並びに地域住民で構成されるまちなみ保存会の役員さんとともに参加してきました。

初日は、「伝建地区の50年これまでとこれから」というテーマで、大阪市立住まいのミュージアム増井正哉館長（京都大学・奈良女子大学名誉教授）による記念講演、そして伝建制度創設から50年の節目の年ということで、一番初め（昭和51年）に重伝建地区に選定された7地区（仙北市角館・南木曾町妻籠宿・白川村荻町・京都市祇園新橋・京都市產寧坂・萩市萩市平安古地区）の首長が壇し、それ

午後からは、文化庁主催の記念シンポジウムも行われ、國學院大學下間久美子教授による基調講演ののち、前日の5市町村7地区の住民組織の代表者が実践を紹介しました。特に、防火体制の強化や住民と連携した防災訓練の重要性など、今後の地域運営に活かせる多くの学びがありました。

高松市中心市街地 夜間景観ガイドラインの策定に向け支援

建築プランニング・デザイングループ 水谷 省三

高松市では、中心市街地の夜間景観ガイドラインの策定に向けて取り組んでおり、その支援を行ってきました。このガイドラインは、10月末までパブリックコメントを実施し、策定される予定です。さらに、今後は高松市景観計画の改定において位置付けられる見込みです。

夜間景観ガイドラインの対象となるのは、高松市中心市街地です。JR高松駅や琴電高松築港駅、高松港など陸と海の交通結節点である「サンポート高松」には、ランドマークである高松シンボルタワーやSANAの設計による香川県立アリーナが整備されています。また、日本三大夜灯台の一つ「せとしるべ」(高松港玉藻防波堤灯台)が赤く輝くなど、特徴的で魅力的なウォーターフロントが形成されています。

さらに、サンポート高松に隣接する日本三大水城の一つ「高松城跡」や、その南側に広がる城下町の面影を残す繁華街があります。丸亀町商店街を中心とした多彩なアーケード商店街が連なり、JR高松駅方面から中心市街地のシンボルロード「中央通り」など主要道路で結ばれています。駅前のウォーターフロントから商店街まで徒歩圏内に個性的な資源が集積し、市民

や観光客が訪れる魅力的なエリアとなっています。

この夜間景観ガイドラインでは、「多彩な灯りで煌めくみなどまちの未来の夜景を共につくる」をテーマに、中心市街地の夜間景観づくりの方針性を示しています。サンポート高松や高松城跡、商店街エリアなどを魅力的な夜景スポットとして演出し、沿道のまちなみの光で回遊ルートを形成することで、夕方から夜にかけて人の流れを生み出すことを目指しています。

ガイドラインの巻末では、魅力的な夜景づくりのケーススタディとして、中央通りの歩道空間やクスノキのライトアップ、水辺からサンポート高松を望む突堤のライトアップなど、公

共空間の将来イメージを提示しています。これらを参考に、地元商店街や事業者、行政機関が連携し、夜間景観づくりに取り組むことを期待しています。

業務名：高松市景観計画改定業務
期 間：2024年6月～
発注元：香川県高松市
担 当：水谷省三、坂井信行、山崎将也、藤田始史、小宮伊織

せとしるべとシンボルタワー

港に向かう通路のケヤキのライトアップイメージ



サンポート高松の夜景



景観とは、それに気づく人がいて成り立つもの

東京事務所 山崎 将也

板橋区赤塚地区は、荒川や海の浸食作用により削られた板橋崖線の上に位置しており、荒川に流れる小河川で削られた谷筋が入り組むスリバチ状の地形や農地、樹林地などの自然環境が特徴的な景観を形成しています。

令和5年度から6年度にかけて、区景観計画に位置付けられた景観形成重点地区の指定に向けて、地区の人たちと一緒に「景観まちづくりプラン」を作成する業務をお手伝いしました。

本業務は、地区の特徴や景観について学び、まちづくりプラン作成を行う勉強会「ワクワクあかつかPROJECT」と、誰でも気軽に参加できる景観イベント「ワクワクあかつかPROJECT」を両輪で行い、地区の人たちが楽しみながら地区の良さを発見し、景観について考えることを大切にして進めました。

そのため、勉強会も専門家をゲストに迎えて、スリバチ地形やみどりを体感するまち歩きのほか、自分たちで考え方を動かしながら望ましい景観を作るクラフト的なワーク、勉強会での検討したことを3Dマップ化し、VRやARで新しい赤塚の姿を体感してもらう機会など、赤塚の景観に関する様々な体験を通じて、自分事として赤塚の景観を考えていく流れとなるよう意識しながらプログラムを考えました。

イベントでも赤塚の巨大地形模型を作成・展示したり、赤塚の歴史・風景などに関するクイズやデジタルスタンプラリーなど参加型の内容を盛り込むことで、多くの人に赤塚の魅力を知つてもらい、景観づくりのすそ野を広げていく取組みを行いました。

合計7回の勉強会と4回のイベントを通してとりまとめた景観まちづくりプランは、令和7年3月、勉強会から区長に対して提案され、現在、これをもとに板橋区により景観形成重点地区指定に向けた検討が進められています。

今回のプロジェクトを通じて、地区の人たちに赤塚ならでは景観的な特徴があること、それを守り生かしていくことが赤塚の良さをより高めていくことになることを少しでも感じてもらいたいと思いながら取り組んできましたが、勉強会の参加者からは、長年住んでいるが初めて知ることが多くて赤塚のことをもっと好きになつたといった声を聞けたことが何よりも大きな成果だと感じています。ちょうどだけ年齢層高めの勉強会でしたが（ごめんなさい！）、参加された方の学びへの積極性や好奇心の強さなどに改めて気づかれ、私も負けていられないと思った2年間でした。



上：「ワクワクあかつかPROJECT」の様子
下：ワークショップの様子

業務名：	赤塚四丁目・五丁目地区 景観まちづくり推進調査等委託
期 間：	2023年5月～2025年3月
発注元：	東京都板橋区
担 当：	山崎将也、水谷省三、竹中健起、藤田始史、坂井信行



—令和7年度都市景観大賞・優秀賞受賞—

人々の活動によって生まれる「景観」

生活デザインループ 嶋崎 雅嘉、太田 雅己

「おにくる」周辺で生まれる「人の活動の景」

2023年11月に大阪府茨木市にオーブンした文化・子育て複合施設「おにくり」が、令和7年度都市景観大賞において「おにくり周辺地区」として優秀賞を受賞しました。アルパックも、この施設整備に関する一連のプロジェクトにかかわった一員として名前を連ねています。

受賞した理由はいくつか挙げられていますが、そのうちの一つとして、「ビジョン構築プロセスの充実度が最終的に形になった施設と人の活動の景を支えていることに注目したい」「立地特性ならびに使い方に関する住民の濃密な対話をしっかりと受け止めるべく、それに答えた高質な建築デザインとなっている。そのため至る所を居場所とする市民の景が溢れている」と示されています。

おにくりの整備は、市民会館跡地周辺エリアで設定したキーコンセプト「育てる広場」のもと、施設や広場を市民と共に考え、成長していくエリア整備を目指し、100回を超えるワークショップや社会実験を経て実現しました。

アルパックも「育てる広場」の実現にむけて、3年間にわたり、市民と一緒に作った仮設芝生広場「IBALAB」や、市民会館跡地周辺市街地のまちかどや軒先、跡地に整備された暫定広場「IBALAB@広場」を舞台として、様々なワークショップや社会実験を行いました。

社会実験では、まちを楽しむ人たち同

士がアイデアを出し合い、まちや広場を使いまくり、市民自らが広場の利用ルールを紡ぎだしていました。参加した市民の皆さんには、「おにくるが設計・整備される前の皆段階から、「市民自らが活動やまちに関わること」や、「多くの人のつながりが生まれること」「自分たちで使い方を決めることができる」と「期待感と参画意識を高め、茨木市における活動人口が高まつたのです。

I BALAB の取組は、2019年に「IBALAB plus」と題し、市内中心部の公的空間を活用する社会実験として、まちなかに展開を広げました。おにくるが



社会実験実施の様子

「みちくる」では東西軸（JR茨木駅と阪急茨木市駅をつなぐ中央通りと東西通り）の魅力を高めるため、景観デザインの指針となるストリートデザインガイドラインを作成するとともに、その検証のための社会実験を実施しました。

ガイドラインでは、道路空間、沿道空間だけでなく、歩道から軒先に至る空間を「共創空間」と定義し、居心地のよいまちなかを形成するために重要な空間と位置付けました。この「共創空間」に、滞在や交流が生まれる利活用を行なうことで、人の活動がまちに表れ、景観となる空間づくりを目指しました。

「共創空間」の利活用を検証するための社会実験として、一時的に車道を止めて滞留空間等を設置し、沿道事業者や歩行者による利用を進めましたが、準備の段階で何度も沿道事業者等のステークホルダーに説明や相談を繰り返すことで、少しずつ共感を得られました。

本取組は現在も継続中で、ますます沿

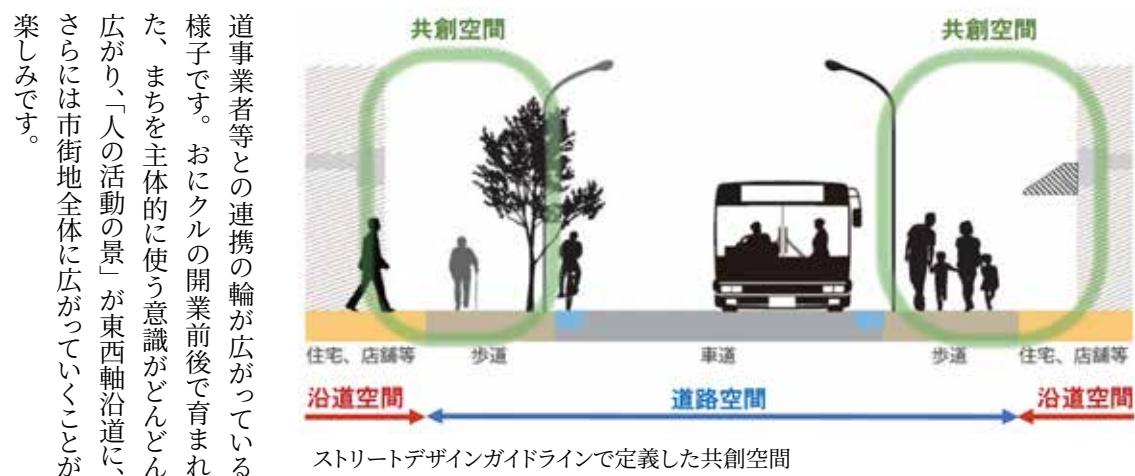
できた暁には、おにくるに集まる人の流れがまちなかに波及し、まちなかに人が歩いて楽しんでいる風景を想像しながら取り組んだことを思い出します。

それも一つのきっかけとして、茨木市では、市民会館跡地周辺エリアを中心としたグランシードデザインを設定し、周辺道路の沿道景観の誘導に向けた「みちくる」という取組に発展させ、跡地整備の波及効果を市街地全体に広めていきます。

「みちくる」では東西軸（JR茨木駅と阪急茨木市駅をつなぐ中央通りと東西通り）の魅力を高めるため、景観デザインの指針となるストリートデザインガイドラインを作成するとともに、その検証のための社会実験を実施しました。

ガイドラインでは、道路空間、沿道空間だけでなく、歩道から軒先に至る空間を「共創空間」と定義し、居心地のよいまちなかを形成するために重要な空間と位置付けました。この「共創空間」に、滞在や交流が生まれる利活用を行なうことで、人の活動がまちに表れ、景観となる空間づくりを目指しました。

「共創空間」の利活用を検証するための社会実験として、一時的に車道を止めて滞留空間等を設置し、沿道事業者や歩行者による利用を進めましたが、準備の段階で何度も沿道事業者等のステークホルダーに説明や相談を繰り返すことで、少しずつ共感を得られました。



おにくるは、現在、年間200万人が訪れる、様々な市民、団体による多彩な活動、企画が200日以上展開され、魅力的な風景が生まれる施設となっています。それは、施設整備及び周辺市街地での展開に至るあらゆる場面で取り入れられた「場や人を育てる」プロセスそのものが「人の活動の景」を創出し、それがまさに「人の活動の景」を創出したことになります。

業務名：	市民会館跡地エリア活用ワークショップ業務 暫定広場運営検討等支援業務 中心市街地等における景観形成・保全推進業務 茨木市東西軸社会実験実施支援業務など
期間：	2018年5月～2024年12月
発注元：	大阪府茨木市
担当：	嶋崎雅嘉、絹原一寛、山本貴子、羽田拓也、竹内和巳、太田雅己



新・関西将棋会館

オープンから1年が経ちました

三浦 健史

建築・プランニング・デザイングループ



将棋盤を連想させる、木の角材を組み合わせたような外観の新・関西将棋会館

昨年の12月3日、日本将棋連盟創立100周年に合わせて、大阪市福島区から高槻市に移転した新・関西将棋会館がオープンしてから、1年が経ちました。アルパックは本事業のプロジェクトマネジメントを担当しました。

大阪市福島区の旧会館は、味のあるタイルが特徴的で、数多くの熱戦の舞台として使られてきました。一方で、躯体や設備の老朽化、セキュリティ面、機能面などの課題を多く抱えていました。これらを解消すべく高槻市への移転新築の基本方針が定まった頃から、アルパックがお手伝いすることになりました。

市も交えた事業全体についての議論や発注方式についての検討と並行して、旧会館の状況や課題について調査、整理し、あるべき新会館のコンセプト、機能規模などをまとめる、いわゆる基本計画を策定しました。

特に新会館のあるべき姿については、日常的に使われる職員の方々、若手棋士・女流棋士の先生方とワークショップを行い、皆さんの思いが詰まったコンセプトを練り上げました。

発注方式については、設計施工一括発注方式を採用し、公募型プロポーザルで選定することになりました。先ほどのコンセプ



オープン時に商店街の中で開催された将棋イベント



「駒音公園」に面した1階ショップには様々なグッズが並ぶ



高槻市産風倒木（2018年の台風21号によるもの：アルパック所有）を
プランターにして寄贈（有限会社田中製材所 制作）

トを踏まえた提案を募集したところ7者の提案があり、審査により大成建設株式会社の提案が採用されました。折しも工事費高騰の影響を受けたものの、ようやく完成に至りました。

新会館でまず特徴的なのは、市整備の「駒音公園」に面した1階にショップと将棋道場があることです。多くの将棋ファンや子どもたちが来訪し、将棋を楽しむ様子がまちににじみ出る一方、利用者側も気持ちの良い環境で将棋を指したり、グッズを選んだりすることができます。将棋会館移転を機に将棋熱が高まる高槻というまちへの関わりを象徴する場になっていると感じます。

エントランスホールには、建設にあたりクラウドファンディングやふるさと納税で寄付された企業・個人の方々の銘板が展示されており、多くの方々の支援で完成したことには思ひが至ります。

2階から上階には、対局室や事務室などがあります。前面の駒音公園の植栽が新会館の中庭に連なっていく提案が実現しており、対局や事務の合間に目に入る植栽で心安らぐ環境となっています。

駒音公園には将棋や新会館にゆかりのある木が植えられており、将棋盤に使われる御藏島の黄楊や桂馬の一字にもなっている桂などを見ることができます。

将棋会館の移転に伴い、高槻市は「高槻市将棋のまち推進条例」を制定され、

将棋振興に関する様々な取り組みをされています。商店街でもオープン時には歓迎イベントが実施されました。近年は棋士の方々が出前で食べられる将棋メシが話題に上ることも多く、周辺もますます盛り上がりっています。関係の方々のご尽力の賜物かと思いますが、伺うたびに将棋によるまちの活性化を感じています。

筆者は10年以上前にアマ初段を頂いていたこともあります。記念すべき事業に関わる機会を頂き大変光栄でした。何より当地が盛り上がりしている現状は感慨深いです。将棋をあまりご存じない方も、1階のショップや公園、近隣のおいしい食事などいろいろ楽しめますので、ぜひ一度お立ち寄りいただき、将棋文化に触れていただければと思います。

業務名：	新関西将棋会館整備における総合技術支援業務
期 間：	2021年9月～2024年12月
発注元：	公益社団法人日本将棋連盟
担 当：	三浦健史 (昨年度までアルパックに在籍していた畠中直樹、杉本健太郎も、本業務を担当しました)

パリ・ウィーンのメインストリートの今 歴史と未来が交差する都市

代表取締役社長 中塚 一

パリ・リヴォリ通り

持続可能な都市近接性に関する国際会議へ

9月4～5日のパリでの「持続可能な都市近接性に関する国際会議」に御堂筋関連で大阪市、大学の先生方と共に出席するのに合わせて、パリ・ウィーンの道路空間再編関連の産官学の様々な方々とのミーティングに参加してきました。

パリのシャンゼリゼ通り、ウィーンのマリアヒルファー通り。これらのストリートは今、単なる都市の顔ではなく、未来の都市像を先導する実験場へと変貌を遂げています。今回の産官学の様々な方々とのミーティングと現場視察では、二つの都市が歴史を継承しながら、地球温暖化や多様性と包括といったグローバルな社会問題に対応し、都市空間の「車から人へ」の転換を一つのプロジェクト・ツールとして、市域全体に広げようとしている力強い意志を感じ取ることができました。



パリ・シャンゼリゼ通り

パリ～「15分都市」の実践～

パリでは、カルロス・モレノ氏が提唱する「15分都市」構想を掲げるイダルゴ市長の固い意志のもと、エコロジカルな改革が全域で実践されていました。メインストリートや広場から、横道、小学校前まで、「歩行者空間化」の波が市域20区全体に及んでいます。その理念は、地球温暖化対策から、近接性、生物多様性、都市の健康へと大きく進化し、公共空間が公園化（パークナイス）、公共施設や商

業施設のリノベーションは循環型ライフスタイルを提案する場へと変化していました。様々な方々との対話や現場で実感したのは、色々な反対意見がある中でも、市民との丁寧な熟議と「自由・平等・友愛」の民主主義の根源を背景に「小さな都市改造」を積み重ねる、「挑戦し続けるパリの今」でした。



ウィーン・マリアヒルファー通り

ウィーン

～シェアード化する都市と市民社会～

一方、ウィーンの変革は、歴史的な景観や街区構成と様々なモビリティとの連携や調和が印象的でした。「シェアードスペース」や「歩行者専用道路」の市域全体での整備は、リング通り内から、横道、つながるストリート、さらには「スーパーブロック」による地域単位の道路空間の公園化へと展開していました。特にスーパーブロックは、バルセロナやベルリンなどを参考にしつつ、低所得者層や移民層が集まる地域の特性を考慮したウィーン独自の取り組みでした。

また「赤のウィーン」の集合住宅カール・マルクス・ホーフから、低炭素化を徹底したスマートシティであるアスペルン・ウィーンのアーバン・レイクサイドまで、新旧の住宅地開発も、時代背景は違いますが「日常の市民の暮らし」の視点から都市・地域・建築を捉え直す挑戦的な試みでした。自転車や歩行者のモビリティの専門家との議論で交わされた「私たちは前向きなコミュニケーションを確立しなければならない。歩くことは素晴らしいことであり、豊かな人生の一部であり、価値のあることである。」というメッセージは、未来に向けて「私達はどのような社会を築き、どのような暮らしをしたいのか?」といった活発な議論と市民の小さな日々の実践の重要性を再認識させてくれました。

民主主義社会における 都市空間の公平とは

国際会議の基調講演でのヤングール氏の「持続可能で魅力的な近接性(Proximity)を創造する」というメッセージに集約されるような二都市の変革は、市民の日常生活を向上させるための都市の改造でした。しかし、この一つひとつは小さいながらも壮大な都市改造は、新たな共通課題をも生み出していました。その一つが、誰でも自由に利用できる「公的なベンチ」と、飲食代が必要なオープンカフェの「私的なベンチ」のバランス。これは、グローバル・ツーリズム時代のストリートでの共通課題です。また都市経営やエアリマネジメントの財源とグローバル資本主義の挟間でのバランスをいかに取るか。歴史的建造物の維持管理費捻出のため、工事用仮囲いにラグジュアリー・ブランドの広告を掲載する手法は財源確保の現実解ですが、都市の品格と景観との調和は難しい課題です。今回の二都市の挑戦は、御堂筋などにおける私たちの課題と共に鳴しており、民主主義社会における都市空間の公平という根源的な問いを投げかけています。

最後になりましたが、今回の国際会議、ミーティング、視察等で本当にお世話になりました国内外の関係者の皆様に、この場をお借りしてお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

塾
路地奥
サロン

第70回「住民主体のまちづくりは幻想なのか？」

近畿大学建築学部建築学科 准教授 寺川政司氏



第70回の適塾路地奥サロンでは、近畿大学建築学部建築学科准教授の寺川政司氏をお招きし、「住民主体のまちづくりは幻想なのか」というテーマで講演いただきました。

行政計画やまちづくりの構想の中で、「住民主体のまちづくり」は疑いもしない理念として、掲げられています。ただ現場に入ると、ここでいう住民は実際には誰なのか、誰のためのまちづくりなのか分からなくなる場面に遭遇することはないでしょうか。

この悩みに対し講演では、まちが目指す様々な将来像によって主体となる住民が変わることや、対象となる住民が抱える本質を丁寧にひもとき、意見をくみ取っていくことが重要であることをお話しいただきました。

そもそも、主体となる住民間でも目指そうと描く将来が同じということも限りません。住民主体

のまちづくりを進めていくには、住民同士がまちの価値や描く将来像をしっかりと共有することが大切です。加えてまちが動くには、地域主体のボトムアップの視点と政治的なトップダウンの視点の両方が重要になります。そのときの両者の関係を結び、よりよい形をつくるためにも、まちの価値や描く将来像を具体的に共有することが重要です。

寺川氏の講演では、行政と住民の調整役となる専門家が、丁寧に「まちの価値」をきちんと拾い上げられているか。という課題を投げかけていただいた気がします。そのためにも、まちや住民の実態を丁寧に探し、誠実に向かいながらも、事実や状況を見極め、まちの進む道を住民と共につくりあげていきたいと思います。

(内野 紗香)

塾
路地奥
サロン

第71回「エネルギーから始まる地域づくりー能勢・豊能・江坂での実践からー」

株式会社 E-konzal 代表取締役 / 株式会社能勢・豊能まちづくり代表取締役 榎原友樹氏



第71回の適塾路地奥サロンでは、株式会社 E-konzal 代表であり能勢・豊能まちづくりの設立者である榎原友樹氏をお招きし、「エネルギーから始まる地域づくり」をテーマにご講演いただきました。能勢・豊能の地域新電力事業、交通・観光・EV 化の実証、さらに江坂ひとときプロジェクトなど、多角的な実践について、その時々のエピソードを交えながらご紹介いただきました。

中でも、能勢・豊能や江坂ひとときで、子どもや高校生と共に地域の課題に取り組んできた事例が特に印象に残りました。能勢分校 E-bike プロジェクトでは、高校生が自ら課題を整理し、提案した内容が行政を動かす一歩につながっており、江坂ひとときでは、子どもたちが施設内のウッドデッキづくりや芝生貼りに参加し、地域住民と協働しながら場を育てるプロセス

が重視されていました。また、不登校の子どもたちの居場所として供する活動を通じて、「安心して過ごせる余白」の価値を改めて認識されたとのお話も印象的でした。私自身、今回の講演を通して、環境やエネルギーといったテーマを身近で魅力的なものとして伝える重要性を強く感じました。

また、現場で交わされる何気ない会話や小さな試みの積み重ねが、大きな変化の起点になるとお話しは、今後の自分の姿勢を考えるうえでも大きな学びとなりました。榎原氏が一貫して実践されているように、地域の方々との生の対話をはじめ、その場のライブ感の中で生まれ育つものの大切にしていきたいと感じるとともに、小さな一步でもまず動いてみることが新たな気づきや提案のヒントにつながることを改めて実感しました。

(大田 勇樹)

（メディア委員会 高瀬）
考えてみてください。
あなたの「好きな景観」を
今まで考えていくことの重要
性を実感しています。
今号をきっかけに、ぜひ

編集後記

今号のテーマは「景観」です。幼い頃は整然と建物が並ぶ街並みこそが良い景観だと思っていましたが、建築や都市における「地域らしさ」や「美しさ」について考えるうちに、今では風土や営みに結びついた姿に魅力を感じ、雑然とした街角にさえ趣を見いだすようになりました。

記事でも、多様な視点で

「見た目」だけではない景観の価値が語られています。景観業務に携わる中で、普段無意識に見ている景色の中の文化や歴史、地形、暮らしの記憶——折り重なる営みを読み解き「何を守り、何を変えるべきか」をみんなで考えていくことの重要性を実感しています。

アルパックが過去に業務で携わった場所や建物を
レタースのテーマに合わせてぶらりと巡る「アル散歩」。
今回は、なんだか懐かしい「景観」がある奈良県・明日香村を巡りました。



「守れる農地」と 「守り切れない農地」



(写真) 明日香村で紡がれてきた棚田の農村景観。一部には荒れた農地も見られます。

写真は奈良県明日香村にある稻渕の棚田です。奈良県景観資産として登録されており、日本の棚田百選にも選ばれています。棚田全体が見渡せる展望台に立つと、「いま見ている農村風景は、100年前、200年前と大きくは変わっています。いのでは」という感覚になり、多くの人の営みや関わりによって紡がれてきたことが想像できます。

しかしながら、1筆1筆みると耕作されていない農地、林地化が進む農地などがあり、全国各地で問題となっています。国においても、これまでの農業生産の維持・向上政策（例・基本整備、就農支援、スマート農業）だけでなく、粗放的な土地利用（例・放牧、景観作物、エネルギー栽培）、農業生産の再開が容易な土地利用（例・鳥獣緩衝帯、ビオトープ）の検討や支援策などが講じられていますが、現在の扱い手だけでは農地を使い切れない（守り切れない）状況です。

写真は奈良県明日香村にある稻渕の棚田です。奈良県景観資産として登録されており、日本の棚田百選にも選ばれています。棚田全体が見渡せる展望台に立つと、「いま見ている農村風景は、100年前、200年前と大きくは変わっていなさいのでは」という感覚になり、多くの人の営みや関わりによって紡がれてきたことが想像できます。

農村の景観も、こうした多様な担い手で支えられ、ミヤクミヤクと受け継がれていふことが伺えます。



今年のジャンボ案山子は、
ミヤクミヤク

ています。
地域産業イノベーショングループ
武藤健司

株式会社 地域計画建築研究所〔アルパック〕 Architects, Regional Planners & Associates, Kyoto

URL : <https://www.arpak.co.jp> MAIL : info@arpak.co.jp

本社・京都事務所	〒 600-8006 京都市下京区四条通柳馬場西入立売中之町 99 四条 SET ビル 2F	TEL (075) 221-5132
大阪事務所	〒 541-0042 大阪市中央区今橋 3-1-7 日本生命今橋ビル 10F	TEL (06) 6205-3600
名古屋事務所	〒 450-0001 名古屋市中村区那古野 1-47-1 名古屋国際センタービル 7F	TEL (052) 462-1030
東京事務所	〒 101-0032 東京都千代田区岩本町 3-1-9 NOVEL WORK Iwamotocho 5F	TEL (03) 5244-5132
九州事務所	〒 810-0802 福岡市博多区中洲島町 3-8 福岡パールビル 8F	TEL (092) 283-2121
滋賀営業所	〒 527-0012 東近江市八日市本町 9-19 SATSUKI-RO 内	TEL (090) 1422-1096

「レターズ アルパック」は、ホームページからもご覧いただけます。



感想をお寄せください

レターズ 252 号のコンテンツに対するご意見、ご要望等は下記二次元コード、あるいは URL からお願いします。



<https://forms.gle/ELj86CDKdotkvpbw6>